

日本人はなぜ論争が下手なのか

言論のことは言論で決着させるという原則を認めたがらぬ日本人の深層に迫る。

橋爪大三郎
(東京工業大学助教授)

日本人は、論争が下手である。まずこの

事実を、はっきり認識しなければならぬ。

日本人は日頃、日本人とばかりつきあっているの、自分が論争が下手だと気がつかない。そもそも、論争をしようという発想がない。その証拠に、根回しが上手だとか、口がうまいとかいう人はいくらでもいるが、論争が好きで仕方がないという人は見たことがない。

日本人が、論争が下手で、論争に関心がないのは、論争をしなくても生きていける

からである。むしろ論争などしないほうが、

「あの人は人間が出来ている」などと一目置かれて、社会的な評価が高まったりする。こんな変なことになるのも、日本社会が独特の歴史と文化とを背負っているからだ。

論争とは何かという前提

そこで以下、日本社会のどこがどう独特かを、いろいろ議論したいわけだが、その前提として、論争とは何なのか、という問

題をまず片づけておこう。

論争は、単なる口喧嘩や言い争いと違って、一般につきのような特徴をもっている。

- ① 論争の当事者は、互いの対立を自覚している。
- ② 双方の主張は、公開のかたちでのべられる。
- ③ 論争の目的は、「勝利」を収める（自分の優位を証明する）ことである。
- ④ 主張が論理的、かつ説得的であったほうが、「勝利」をうる。

ひとこと言うならば、論争は、言葉や武器にした「戦争」である。言葉以外の武器を使わないこと。それに、言葉を使う場合にも、それなりのルールに従うこと。戦争であるからには「勝ち負け」がある。「勝利」をめざして全力をあげるのが、論争を闘う者の義務である。

理的、かつ説得的」に主張を展開したほうである。ただし、論理性と説得性とは、しばしば一致しない。論理的であるかどうかはどうでもよく、説得的なだけの言論は、単なるレトリックである。あべこべに、まったく説得的でない、論理的なだけの言論は、単なる屁理屈である。論理性と説得性が適切に組み合わせられないと、論争に勝

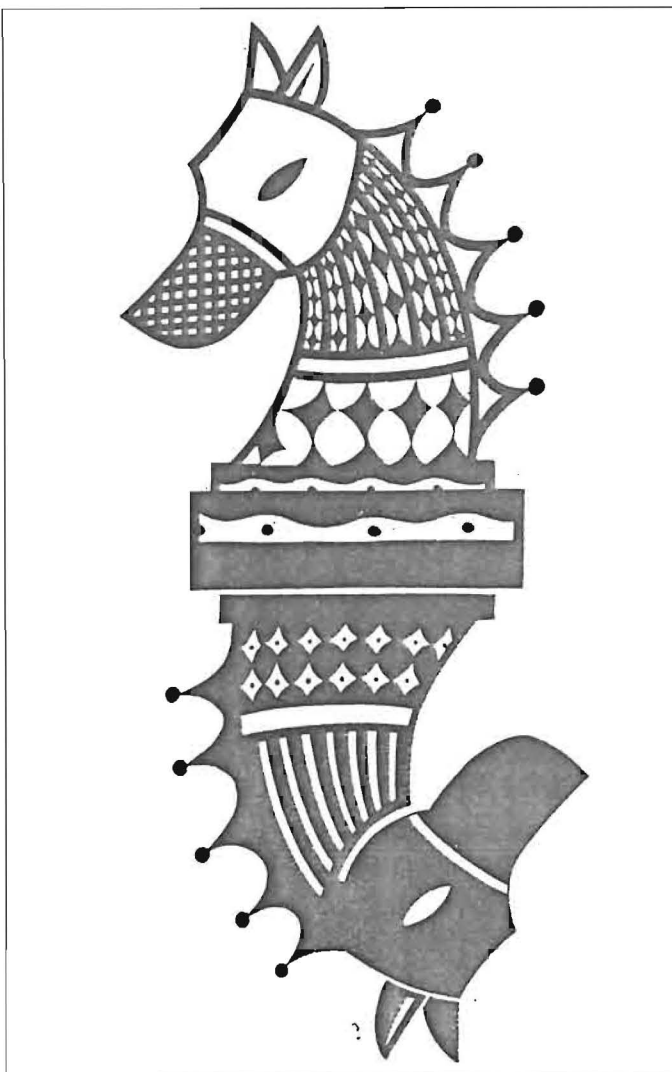
利できない。ただしこれを、どう組み合わせたらベストなのか、手軽な公式はないのである。

言論のことは言論で決着するという原則

言論のことは、言論で決着する。——この原則がいったん定着すると、論争術（言論戦に勝ち抜く技術）が格段に進歩し始める。古代ギリシャ人たちは、ポリス（都市国家）の経営や哲学・数学の難問に頭をひねり、毎日のように論争を闘わせた。三段論法や対話法（弁証法とも言う、相手の矛盾を利用して議論を進める技術）、修辭法（レトリック）、デマゴギーなど、論争のあらゆる技術がこの頃すでに揃っている。

いっぽう日本人が論争下手なのは、「言論のことは、言論で決着する」という原則を採用したことがないからである。この原則が成り立つためには、言論と、それ以外のことがら（暴力などの実力行使、人間関係、感情、利害関係や打算、など）が切り離されている必要がある。さもないければ、論理学と

Illustration=かわぐちせいこ



か、哲学とか、法学とか、科学とかいった言論のシステムが成り立つ余地がなくなってしまう。歴史を振り返ってみると、日本人はこうした言論のシステムに、あまり関心がなかったことがわかる。それらが日本に紹介されたのは、たかだか一二〇年あまり前のことなのである。

日本は小さな島国で、住民の同質性が高い。そのため、たいいていの紛争は妥協すれば解決できた。妥協するのに、原則は邪魔になる。だから、どんなかたちの原則であれ、なかなか発達しにくいのである。

日本は、隣接する大国——中国の文化に、いつばうで憧れを、またいつばうで異和感を抱いてきた。中国には、正統なテキストを編纂し、それを読解する伝統(儒教の伝統)がある。また、独特の論争術も発達している。日本は中国から、文字もテキストもまるまる移入した。けれども、もともと根本的なところで儒教の伝統を受け入れなかった。その結果、中国流の論争術は、日本に根づくことができなかった。

また日本は、西欧文明を近代化のモデル

とした。そしてその、科学技術や社会制度を移入した。西欧文明は、キリスト教を基盤としている。科学技術も社会制度も、この基盤のうえに形成されたものである。しかし日本は、キリスト教を受容しなかった。そのため、キリスト教に付随する論争術も、受容できなかったのである。

キリスト教と、儒教。この二つは、異なつた文明の異なつた言論のシステムを代表している。日本はこのどちらからも、論争術を学ばなかった。また、それ以外の文明からも、学ばなかった。日本人が論争が下手なのは、要するに、論争の必要性も、論争の技術も、論争の経験も、欠けているからなのである。

それでは、キリスト教や儒教は、どのような論争術を発展させたのだろうか。順にそれを考えよう。

キリスト教の論争術の特徴

キリスト教の場合、「悪魔」の観念がもつとも重要である。

唯一神が世界を創造したと考えると、この世の悪をどう説明するかがむずかしい。

悪も神がつくり出したと考えるか、それとも悪は別の誰か(たとえば悪魔)がつくり出したと考えるか、あるいはユダヤ教(旧約聖書)にはもともと、悪魔の考え方はなかったが、キリスト教には、いつの間にか悪魔の考え方が根を下ろした。これは、この世を善/悪の対立ととらえる、ゾロアスター教が姿を変えてもぐりこんだのではないかとされている。一神教の枠組みで悪を理解しようとすれば、「善の欠如」と定義するのが神学的にいちばんすっきりしている。しかし、一般民衆も、また異端審問に熱狂した宗教裁判所も、悪魔の存在を信じて疑わなかった。キリスト教は、打倒すべき敵、究極の反価値として、悪魔を知っているのである。

悪魔の特徴をまとめておこう。まず第一に、悪魔は人間でない。もとは天使で、神を賛美していたが、神に背いたため地獄に墮とされたという(墮天使)。(ちなみに、神も人間ではなく、別種の生き物、キリスト教

は、神/天使/人間という、三種類の知的存在を想定している。)第二に、悪魔は、人間と契約を結ぶことができる。これは、神が人間と契約を結ぶことの裏返しである。第三に、悪魔は、神と違い、さまざまに姿かたちを変えて、人間社会のいたるところに出没する。彼らの目的は、あらゆる機会をとらえて神に反対し、人間が神に救済されることを妨げ、人間を神に背かせることである。

ルターは、悪魔の存在を信じていた。カルヴァンはもつと徹底して、悪魔を抽象化し普遍化した。カルヴァンによれば、人間はどうしようもないほど罪深く汚れており、よいところが少しもなく、神の助けがなければ何ひとつ正しいことができない。人間は人間を信じてはならず、神を信じなければならぬ。宗教改革は、人びとが互いを悪魔と見なす視線を、人びとのあいだに強くに張りめぐらした。

キリスト教の信仰は、悪魔との論争を通じてその正しさが証明され、鍛えられる。それは、宗教改革の発明でなく、もともとキリスト教の出発点だった。福音書の伝え

る荒野のイエスは、四〇日もの断食のあと、やって来た悪魔と論争する。悪魔は言う、「お前が神の子なら、石をパンに変えてみたらどうだ」。イエスは答える、「人はパンだけで生きるのではない。神の口から出る一つひとつの言葉で生きる」(申命記8:3)。悪魔はまた言う、「お前が神の子なら飛び降りたらどうだ、『神が天使たちに命じると、お前の足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手でお前を支える』」(詩篇91:11)とある。イエスは答える、「お前の神である主を試してはならない」(申命記6:16)とも書いてある。悪魔もイエスも、聖書を引用して議論する。イエスは悪魔との論争に勝ち、悪魔(サタン)を斥けた。そうである以上、イエスが神の側にいることは明らかだ。これは、イエスが神の子であることの、間接的な論証になっている。

イエスと悪魔との論争から出発したキリスト教。その論争術は、つぎの特徴をもつ。

①権威あるテキスト——聖典——に正しさの規準をおく。

②テキストを引用し、解釈し、論理展開する論争の主体は、あくまでも個人である。

ユダヤ教やイスラム教は、テキストのほかに、伝承(ユダヤ教のミシュナー、イスラム教のハディース)の権威を認めている。これは、人びとのあいだを集合的に伝わったものなので、論争は学統主体となり、個人を析出させにくい。これに対して、キリスト教はもともと個人救済の宗教であるうえ、聖書の権威を極端に重視する(律法や儀礼や伝承の権威を認めない)ので、神—テキスト—個人がストレートな関係に置かれる。

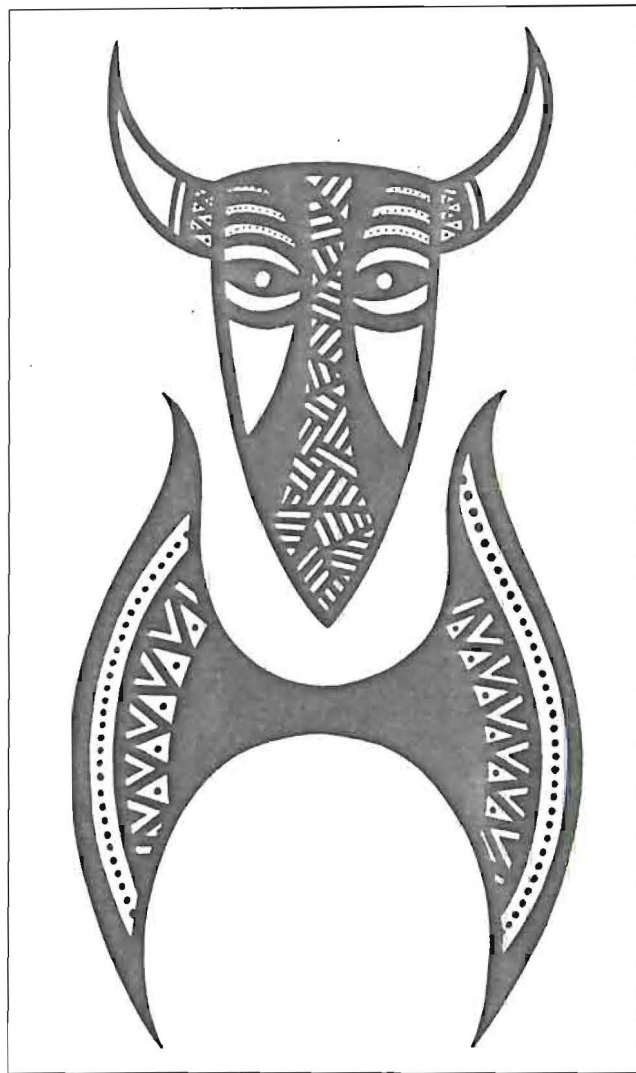
そして、①②のテキストを、「観察可能な事実」に置き換えると、キリスト教の論争術がそのまま、実証的な学問(自然科学)の言論のシステムに変成するのがわかるだろう。

政治の影響を受ける 中国的言論のシステム

それでは、中国の言論のシステムはどうであろうか。

中国でも、「言論のことは、言論で決着す

「という言論のシステムが、いちおう成立した。しかしそれは、完全でない。というのは、中国的な言論のシステムは、社会の他の部分から完全に独立しておらず、政治のシステムから影響を受けるからである。中国の論争術も、権威あるテキストに正しさの規準をおく。けれども中国の場合、一神教が成立しなかったため、その「権威」は政治的に、つまり社会的プロセスを通じて



で、決定される。儒教の基本テキストが確定したのは、秦漢帝国の統一と無関係でなかったし、その権威は、政治情勢が変化するたびに、再確認されなければならなかった。このため、中国の論争術は、いちじるしく政治的な色彩を帯びる。キリスト教では、正しさの規準は神（社会外的な不動の原点にある）信じられている。政治権力に対する個人的抵抗が正当化できる。これに對

して、中国では、正しさの規準が政治的に変動しうる。そこで論争では、自分を正当化できる政治的文脈（実力者の応援がある、類例の先例がある、……）をいかに援用するか、ひとつの重大なポイントになる。

中国のテキストは、権力の効果を凝集したものである。権力は、テキストを固定することによって、その永続をはかる。これが歴史（正史）であり、また古典である。いっぽう権力は、テキストの効力によって束縛されることを望まない。法の支配（法治）がなかなか成立しないのはそのためである。中国でもたしかに、「言論のことは、言論で決算する」だがそれは、人びとがそれを支持する政治的文脈を受け入れたためである。ただしそのことは、明確に言及されない。言論のシステムが独立しているという外見は、権力にとっても、言論を展開する当人にとっても、有利なことなのだ。

こうして、中国の論争術は、政治力学に對する（過度に）鋭敏な感覚を要求する。これは、異質な他者たちが共存を強いられ、文化的に同化しきれないまま主導権を争い

続けた数千年の歴史の産物である。こういう、他者に対するしたたかな感覚は、日本人に真似のできないものである。

他者を見失った日本人

日本人は、中国から漢字を学んだあと、「権威あるテキスト」の編纂にかかった。その目的は、朝廷（天皇の政權）を中国の王朝になぞらえて、正統化することである。けれども、出来あがった『古事記』『日本書紀』は、中国のテキストといくつかの点で異なっている。まず朝廷の征服事業が、神話的な古代のものに包まれ、歴史的な事実であるのかはつきりしない。これは、当時から日本が、異族の共存を意識していなかったか、意識させなかったことを意味している。つぎに、このテキストは、いかなる意味でも人びとの生活を羈絆しない。儒教のテキストが、中国人の行動原理を与えているのと、好対照である。要するに日本人は、社会を自然に運行させておけばよいと考え、それ以上の、相対的に独立した言論

のシステムを立ち上げなかった。

それでは、異族としての他者たちを見失った日本人は、個人としての自己に對する他者を見出したろうか？

キリスト教は、悪魔の觀念によって、同じ民族、同じ社会、同じ集団のなかの自己と他者のあいだに、鋭い分割線を引いた。これは、キリスト教がもっていた本来の可能性の、発展形態である。いっぽう日本人は、同じ仲間である人と人とのあいだに、このような絶対の分割線が引けるという発想を、どうしても受け入れない。人間は同質で、「腹を割って話せばどんな紛争も解決できる」が、日本人お気に入りのイデオロギーである。

悪魔は、他者を、そして自己の内部の邪悪な部分を、徹底して異化する視線に對して与えられた名前である。この視線は、論争によって開うべき他者を発見する。そもそも論争とは、自己と他者を、互いに対立しあう両極とみとめ、そこで勝利をうるためのよく組織された言論活動だった。論争は、自分が訴えかけるべき他者についての、

ありありとしたイメージがあるときに始まる。（邪悪な）他者についての想像力を欠き、それどころか、自己と他者の区別さえはつきりしない日本人に、論争がどのような道理はない。

論争は学びうる

幸か不幸か、論争は学びうる。少なくとも、科学を日本人がどうにかこなした程度には学びうる。気がつけば、日本は国際社会のなかで、まさに他文明に取り巻かれていてではないか。日本人が他者を発見しようとしまいと、先方はとくに日本を、他者として見ているのだ。すでに論争は始まっている。賢明な日本人なら、論争のルールをいち早く理解し、少なくともルール違反で退場にならない程度には、論争の訓練にとりかかるべきではないか。

* "The Reason Why We Japanese Are Poor At Debate", by D. Hashizume
Jan. 1994